

留学生との接触による日本人学生の「多文化」に対する意識変化

—— 国際福祉開発学部の取り組みからの一考察 ——

カースティ 祖父江

要 旨

近年、留学生が増え続け、諸大学の学部生と位置付けられている留学生が2019年過去最多の人数に達している。しかし、多くの大学では日本人学生と留学生の間の交流は積極的に進んでいるわけではなく、先行研究においても希薄だと指摘されている。本論文では、日本福祉大学国際福祉開発学部に所属する学生を対象に、希薄な関係性の背景要因を検討するとともに、本学部において試みられている交流の「きっかけづくり」を通して、両者の相互理解の変化についての分析を行う。この分析結果は留学生を抱える多くの大学に対して、交流の深化のために貴重な情報を提供する点において意義があると思われる。

キーワード：外国人留学生，多文化意識，多文化共生，グローバルキャンパス，きっかけづくり

1. はじめに－問題の所在

近年日本の大学に留学している外国人学生が増える中、同じキャンパスで学んでいる留学生と日本人学生の「学び合い」や「多文化意識」がなかなか増えないという課題が先行研究からも浮かび上がってきている。本論文では、「学部留学生」の現状を明らかにし、留学生を主に「留学生別科」や「留学生センター」を中心に教育活動を行なっている大学と異なって、日本人学生と同格同様に学部生として扱っている日本福祉大学の取り組みを紹介する。国際福祉開発学部の留学生と、留学生と日常的に接触する機会がある日本人学生にアンケート調査をし、本学部に入学してから互いに対する考え方がどのように変化しているかについて調べた。本論文ではその調査の結果を分析し、成果と今後の課題を取り上げる。

本論文において、日本人学生と留学生の「多文化共生」の発展や「多文化意識」の向上が目的である本学部の取り組みを紹介する。そのため国際福祉開発学部が目指している「多文化共生」や「多文化意識」とはどのようなものかについて、まず定義する必要がある。近年「多文化共生」ということばの意味が日本以外でも熱く議論され、Bauman (2011) が指摘するように、多くの

場合明確に定義されておらず、むしろ「同化」と対照的に「政治的に正しく」用いられている表現となっており、実際に「異なる文化的背景を持つ人たちがたまたま隣に住んでいる」状態を表すこと以上に意味を持たない。本論文は「多文化共生」の定義を大きく議論することを目的としていないが、学部が目指す「多文化共生」の理想像として、ニューヨーク大学の Diane Ravitch 教授の「成功した多文化共生」の定義（「成功した多文化共生とは、異人種間、異民族間の友情を導き出す、コミュニティの絆を築くものである」¹⁾）を基本としたい。また、「多文化意識」は英語でよく使われる (multi) cultural awareness という概念に基づき、「自分と異なる国や環境で育った人との間に意見や価値観に相違があることに対する意識」²⁾ と定義する。日本語においてより頻出する「異文化理解」に随分近い概念であるが、あえて、ここでは「自国以外の文化を理解する」ことより、日本人学生と留学生が互いにそれぞれ持っている文化的背景が違うということが分かった上で、対等に学部での「学び合い」を目指す意識の形成に焦点を当てたい。

1.1 なぜ留学生が増えても意識変化に繋がらないのか

日本の大学の外国人留学生は年々増えており、令和元年5月1日には312,214人となり、前年と比べて13,234人(4.4%)増えた。平成16年以降、大学(大学院を含む。)、短期大学、高等専門学校、専修学校(専門課程)へ入学する準備教育を実施する教育施設および日本語教育機関に在籍する留学生を調査している独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)によると、同じ令和元年5月1日に日本の大学の学部で在籍している留学生は89,602人であり、過去最多となっている³⁾。

留学生が増える中、一見して国際色豊かなキャンパスが多くなっているにも関わらず、日本人学生と留学生の有意義な接触場面が少ないという課題が先行研究においても指摘されている。上記に定義した「成功した多文化共生」の定義にある「友情を導き出す...絆」が生まれることが教育環境自体によって妨げられていることが山本(2019)、永井ら(2014)の指摘から、以下のように窺える。

官民一体となり留学生受け入れ政策が議論され、高等教育機関におけるグローバル人材育成という枠組みのなかで留学生教育のあり方が検討され始めている。だが、留学生受け入れの意義やなぜ留学生に日本語を教えるのかについて、その根本的な理念は十分に議論されているとはいえない。世界各国から多くの留学生を迎え入れている大学においてさえ、何かしらの「演出」を施さない限り留学生と日本人がお互いに学び合う環境を創りだすことができないのが現状である。留学生からは「日本人学生と話す機会がない」との不満を、日本人学生からは「関わるきっかけがない」、「何を話せばいいかわからない」という戸惑いの声を聞くことが多い。このまま留学生数が増えれば自然発生的にキャンパスがグローバル化されるとの観測は幻想に過ぎない。(山本2019)

確かに [...] 近年の大学の国際化に相俟って、留学生が増加し、留学生と日本人学生がとも

にキャンパス内で生活を送っているが、日常的に双方はほとんど交わることがない状態である。そのため、「留学生との交流」をうたっていても、それは限られた学生同士の交流であり、その交流もまた、日常の会話や当たり障りのない内容の対話の域を超えることはほとんどない。ましてや、異文化間の価値観を交えた議論や、そこから見出される葛藤や価値観の創造などは望むべくもない状況である。(永井ら 2014)

さらに、学生間における多文化意識の低さによる、日本人学生や留学生の互いへの無関心も先行研究において指摘されている。東京都市大学での留学生・日本人学生の相互認識について、根本ら(2013)は次のように言及している。

大学においても日本人学生と留学生の接触の機会は増えているが、自然な形での友人関係が形成されにくいという現状を踏まえて、異文化間交流への介入の必要性が指摘されている [...] 留学生と日本人学生の交流は消極的で、授業時や昼食時などに留学生だけで集まる様子が伺え、日本人学生は異文化への関心が低い。

また、山下(2019)は学生同士の異文化に対する意識についての課題を以下のように述べる。

大学教育においても、異なる文化的背景を持つ者同士が相互理解を深め、自身のアイデンティティを認識し、多様な人、文化、社会とのつながりを形成しながら自ら行動できるような人材を育成することが求められている。しかし、筆者が所属する大学では、留学生と日本人学生が同じキャンパスで学んでいるものの、両者はほとんど交流することがない状態であり、日本人学生に至っては、留学生の存在に気づいていない者もいると思われる。

本学部生を対象とした調査結果によると、学部に入學した当初の学生にもある程度の「無関心」や「消極的」な思いが窺える。意識変化に関する自由回答のうち、「[本学部]に入るまでは日本の事ですらあまり興味が無かった」というコメントも含まれている。しかし入學した時点で外国人に対する偏見や「恐怖」まで持っていたという学生の方が多かったのは本調査の興味深い点の1つである。以下の3.4で詳しく考察するが、自分の多文化意識の変化についてコメントを求められたところ、複数の学生から入學時に「外国人は怖いイメージだった」、「イスラム教を信じている人はちょっと怖いイメージがあった」、「今まで、中国人は怖くて、口が悪いイメージがあった」、「怖い人ばかりだと思った」とようなコメントが寄せられた。さらに広く調査を行わなければ一般化は難しいが、この概念が一般的に日本の若者の間で共有されているとすれば、意識を変化させるにはなんらかの「演出」や「きっかけ」の提供だけでは十分であるとは思えない。むしろ、学部の意図的な取り組みによって、こうした偏見や恐怖を互いに取り除き、「友情を導き出す...絆」を築き上げることが可能な学習環境を形成する必要がある。

1.2 「キャンパスのグローバル化」と学部留学生の位置付けの問題

留学生が過去最多になったにも関わらず、なぜ「留学生の存在に気づいていない」という状態が発生するのだろうか。背景要因の一つとしては、「学部生」として数えられているものの、多くの大学では留学生全員が日本人学生と同じ教育課程を受けていない現状が考えられる。「学部留学生」として数えられている89,602人のうち、日本人学生と全く一緒に授業を受講しない留学生が一定量を占める。JASSOの数字からはその絶対数は割り出しにくい、大学へ進学するための日本語教育を中心に実施する「留学生別科」、あるいは短期留学生や提携校からの交換留学生に日本語や日本の文化を中心に授業を行う「留学生センター」の管轄下にいる、いわゆる「学部留学生」は少なくない。

まず、留学生別科とはなんだろうか。学校教育法91条において、「大学の別科」は「入学資格を有する者に対して、簡易な程度において、特別の技能教育を施すことを目的とし、その修業年限は、一年以上とする」と定義されている⁴。「留学生別科」とは「大学の別科」の一つであり、日本私立大学団体連合会によると「大学における教育の一環として学校教育法に位置づけられた正規の教育課程で、大学・大学院または短期大学に留学生、研究生、研究員として入学する人のために、準備教育として、日本語及び日本事情・日本文化その他必要な科目を教育することを目的とした教育機関」⁵である。

日本における601の私立大学⁶のうち、71校⁷（11.8%）は留学生別科⁸を運営している。「特別の技能教育」として日本語や日本文化を教えているものがほとんどだが、上記の定義にある「入学するための準備教育」は必ずしも目的ではない。事例をあげると、名古屋外国語大学が留学生別科と指定する「国際日本語教育インスティテュート」を開設している。大学のホームページにおけるインスティテュートの紹介では「海外の交流協定大学から半年あるいは1年の予定で来日する短期交換留学生に対する教育を担う教育組織です。日本の大学に進学を希望する留学生のための準備コースはありません⁹と明確に打ち出されている。同じホームページには「名古屋外大と独自の国際交流協定を結んでいる海外の大学から、2019年度は286人ももの交換留学生を受け入れました¹⁰とある。こうした留学生は「学部留学生」と数えられるものの、日本人と一緒に学ぶ教育課程は受講していない。また、同じ愛知県に所在する名古屋学院大学のホームページによると、「留学生別科（日本研究プログラム）は1989年に開設されました。本別科は学校教育法上、大学の教育の一環として位置付けられた修業年限1年の教育課程であり、海外諸大学から日本研究を目指す者（交換留学生等）や日本の大学・大学院への進学を希望する者に日本語及び日本事情に関する科目を教授している」という。名古屋学院大学の留学生別科は1年35名の留学生を定員としているが、筆者が国際センターの職員と電話面談をしたところ¹¹、その9割以上は提携校からの交換留学生であり、進学のために日本語を学んでいる私費留学生は稀であることが分かった。名古屋学院大学の商学部や国際文化学部などには2019年5月1日現在21名の留学生が在籍していた¹²が、国際センターの職員の話によるとその留学生全員は別科からではなく、独自のルートを辿り入試を受けて学部に入った例であり、学部にいる学生（日本人も留学生も含

む)は目で見える形で留学生別科にいる学生との交流はほとんどないと言う。

一方、国立大学で「留学生別科」に近い働きを担うのは「留学生センター」である。日本にある86の国立大学¹³のうち、54校¹⁴が留学生センターを運営している。留学生センターの形態は大学によって様々だが、日本語教育や留学生のための文化体験が活動の大半を占めるところが多い。また、文部科学省によれば上記の54校のうち、52校が開設している留学生センターの対象は「大学院進学者」であり、明確に「学部進学者」を対象に含んでいるのは東京外国語大学留学生日本語教育センターと大阪外国語大学留学生日本語教育センターのみである¹⁵。

愛知県の事例を見ると名古屋大学は「全学生16,000名の10%以上を海外からの外国人留学生が占めています」とホームページに謳っているが、正規学部生として2019年度に合格した留学生は合計49名で、そのうち半分以上は「G30国際プログラム」という、英語で学ぶ学科に所属している¹⁶。それ以外の留学生は大学院生、あるいは2019年度に218人の留学生を受け入れた短期交換留学プログラムであるNUPACEの受講生だったと思われる。名古屋大学はこうした留学生を「国際教育交流センター」や「国際言語センター」が提供する日本語教育で支援しているが、学部の授業を日本語で受講するためには日本語能力試験(JLPT)において最も難しいN1レベルの取得という相当高いハードルが義務付けられているため、学部レベルの交換留学生のほとんどは英語で開講されているG30の科目を受講していることが推定される。

「留学生別科」であろうが「留学生センター」であろうが、上記から見られるように「学部生」として数えられている留学生の多くは、同じ大学の日本人学生と全く別の学生生活を送っており、日常的に接点が少ないことが窺える。「学部生」と位置付けられているものの、実は進学するための日本語教育を受けていたり、提携校との間の短期交換留学プログラムに参加している学生が多い。一見「国際色」が映える大学が増えている中、こうした状況を鑑みると留学生と日本人学生の接触の機会が依然として増えていない理由が浮かび上がる。安易に「学部留学生が89,602人にも上った」という数字から、大学内の「成功した多文化共生」が必ずしも進んでいるという結論は導かれない。むしろ、大学によっては、「留学生」と見られている学生のイメージが極めて多様で、もとより「国際交流」ができるような立場を与えられていない留学生が多いようである。

しかし、1.1に引用している論文を執筆されている先生方の大学を見ると、根元ら(2013)が所属する東京都立大学や、永井ら(2014)の山口大学はどちらも短期留学生はいるものの、一定量の正規の学部留学生もいる¹⁷。学部留学生として日本人学生とともに学んでいるのに「交流が消極的」であることは筆者が所属する大学でも指摘されている。それに対して、国際福祉開発学部のいくつかの取り組みを通じて、日本人学生と留学生のコミュニケーションと相互理解が深まったことが学生を対象に実施したアンケートの結果でわかったので、以下に紹介する。

次に、筆者が所属している日本福祉大学国際福祉開発学部における留学生の現状について触れながら、「多文化共生」や「多文化意識」を促進するための取り組みを紹介する。

2. 本学部の取り組みについて

2.1 本学部の留学生の現状

日本福祉大学国際福祉開発学部は2008年に開設され、「日本であれ、海外であれ、それぞれの現場（地域、教育、企業他）において、多様な価値観を尊重し、“多文化コミュニケーション力”と多様な意見を取りまとめて前に進める“ファシリテーション力”によって、様々な問題解決に取り組むことのできる、多文化共生社会を生き抜く人を育てていくこと」¹⁸を目標としてあげている。学部として「国際」という通称を抱えながら、外国にルーツを持つ学生がほぼ毎年入学したものの、開設から10年間は留学生が比較的少なかった。筆者が赴任した2017年度には、留学生は4年生1名、3年生1名、1年生1名のみであった。2017年度に学部内で日本語教師養成プログラムを開講したと同時に積極的な留学生募集の取り組みを始めたところ、2018年度には12名、2019年度には29名、2020年度には22名の留学生が入学した。本論文の執筆時には4年生1名、3年生11名、2年生28名、1年生22名という、62名の留学生が在籍している。出身国は（人数が多い順に）ベトナム、ネパール、中国、インドネシア、スリランカ、フィリピン、タイ、台湾である。学部定員は1学年80名で、収容定員を現在満たしており、全体の留学生の割合が19.3%であるが、留学生募集活動を開始して4年目となる来年度にさらに20名前後が入学することを前提に計算すると25%前後に到達することが予想される。

大学の方針に基づいて、留学生全員が入学した年度に学費が50%免除される。2年生以上は前年度の取得単位数とGPAを元に計算された減免率が適用される。正確な減免率は成績、単位数、学年によるが、学年ごとに36～40単位を取得し、GPA2.5以上を保つ学生は最大限である65%減免まで達成できる。この学費減免制度が動機になっているせいか、2020年度の2年生留学生の平均GPAは2.55（学部全体[120名]2.28、日本人学生のみ[92名]2.20）であり、学習に対して真面目に取り組む姿勢が窺える。同じ2年生の成績分析によると、上位20名のうち6名、また最上位2名が留学生であった。むしろ、学部下位20名のうち、留学生が2名しかおらず、下位10名にはいない。

2.2 留学生と日本人学生の交流

日本福祉大学には留学生センターも別科もなく、週2コマの日本語教育以外、本学部の留学生は日本人の学部生と全く変わらない時間割を持ち、日本人の同級生と一緒に授業を受講している。学部科目は英語・日本語コミュニケーション科目、福祉開発科目、社会人教養科目や演習科目を含み多岐に渡るため、留学生が入学当初から追いつくのが大変な場合もある。学費や生活費を稼ぐため、在留資格で許される最大限の週28時間のバイトをしており、同じ出身国の学生と一緒に住んでいることが多いことも鑑みると、日本人との交流が進みそうにない。しかし、以下に示すように、調査を行ったところ、留学生も日本人学生も、互いを知り合ったことで考えが変

わり、友人としての関係が深まり、時間が経つにつれてもっと積極的に互いに付き合いたいと思う学生が多いことがわかった。

学生のアンケートへの回答から、国際福祉開発学部の教育課程に含まれている3つの取り組みがこの状況に関与しているというヒントを得た。以下に紹介する取り組みが相まって、日本人学生と留学生の互いに対する理解が深まる傾向を生み出していると思われる。

2.2.1 授業中のグループワーク

国際福祉開発学部のシラバスには演習形式を取り入れた科目が多く、少人数で行う作業（発表資料の作成、イベントの企画、調査など）を頻繁に実施する。グループ分けするとき留学生を日本人学生の間分散すると作業しながら自然にお互いを知り合うきっかけとなる。学部のディプロマポリシーの一環である「多文化環境において、異なる価値観をもつ他者それぞれに寄り添い、つなげるコーディネーターとして行動できる」を元に1年ゼミ（基礎演習）をはじめ、多くの科目には相互コミュニケーションと共同作業を必要とする部分が含まれている。

学部の教育プログラムの一つである日本語教師養成プログラムを例に挙げる。このプログラムには、将来日本語教師を目指す留学生も活発に参加している（現在の2年生のうち、プログラム科目を履修している63人中22人が留学生である）。授業中に行うグループワークを通して、留学生は日本語の理解を深めるだけでなく、自ら難しいと感じる日本語学習の側面や、外国人学習者として得た日本語の体系的理解を、それまでに母語についてそのように考えたことがない日本人学生に説明する機会が提供される。また、将来日本語教育に関わりたいと考えている日本人学生が留学生に対して、自分たちが考える日本語の教え方を試したり、母語話者として持つ日本語の「直感」を留学生と共有することによって、1年生から外国人学習者に「教える」難しさと面白さを体験することができる。

このようなグループワークはゼミ活動、英語科目、福祉や開発の演習科目にも展開され、学部生に多くの接触場面を提供している。当然のことながら、学生たち自身にグループを作らせると友達同士で固まることになり、交流の輪が広がらないという結果を招く。効果的に利用するためには、教員がグループ分けをするときに留学生と日本人学生を適切に配置する工夫が必要である。

2.2.2 ワールドユースミーティング

国際福祉開発学部のワールドユースミーティング（以下WYM）はアジア各国の大学生・高校生による英語プレゼンテーションを中心とした国際交流イベントである。毎年8月に、マレーシア、カンボジア、フィリピン、韓国、中国などの大学からの学生を迎え、事前にskypeなどを使って作り上げたプレゼンテーションに参加するほか、招聘された海外からの学生との交流も幅広く企画される。イベントの準備や司会だけではなく、参加校全体との意見調整、ホームステイ手続きや開催前の交流イベント企画まで、国際の1-2年生が担当する。

全員出身国がアジア圏である国際福祉開発学部の留学生にとって、このイベントは言うまでも

なく大活躍の場になり、前期の間少しでも日本人学生のレベルについていけないと自信を失いかけたとしても、WYMでは大きな役割を果たす留学生が多く、日本人学生とのコミュニケーションを深めるきっかけになることは間違いない。特に英語が得意なネパール人、スリランカ人、フィリピン人学生はWYMの準備中と開催時に日本人学生から頼られることが多く、相互に対する尊敬を覚える場になると思われる。大学がとった事後アンケートでは、「自信が持てるようになった」と答えた学生は8割以上いると言う。

本調査の結果では、WYMは日本人学生・留学生の多くに「仲良くなったきっかけ」としてあげられている。留学生にとって、海外からくる「お客さん」に対して、主催者側に立つ機会となるため、自分たちの大学に対する帰属意識が強くなるという。しかし、課題も見出される。「統括の打ち合わせが空きコマに入れられ、バイトがあるから出席出来ないと言ったら先輩に怒られた」、「留学生と一緒に作業すると時間がかかるからいやだと言われた」や「WYMで日本人学生と仲よくなったが、イベントの後に継続しなかった」というコメントを留学生から聞いている。夏休みの直前に開催されるので、終わってからみんなが1ヶ月ほど休みに入り、留学生がバイトなどで忙しくなることも、「仲良くなった」勢いを保てない原因の一つかもしれない。

2.2.3 留学生を「支援する側」に立たせる

上記の2点を踏まえた取り組みとして、筆者は2019年度に2年ゼミ（総合演習）でベトナム人留学生4名に一定のリーダーシップを取らせ、共同作業だけではなく、日本人学生と他国籍の留学生（タイ人1名、中国人1名、フィリピン人1名）を「支援する場」を提供した。2019年11月に、学部科目の一つである「国際フィールドワーク」として、ベトナム人留学生4名とその他のゼミ生14名と一緒にハノイでの調査研修を企画した。6月あたりから、週1度のゼミで毎回30分を留学生に任せて、基礎的なベトナム語、また、ベトナムの通貨、ベトナムの食生活などについて発表をもらった（図1）。さらに、フィールドワークの単位を取得するための条件として調査を企画し、実施して報告書を書くことが義務付けられているが、調査の企画の段階からゼミ生を4つのグループに分け、それぞれのグループに一人ずつベトナム人留学生をリーダーとして配置した。学生の調査は「ベトナムにおける多民族性」、「ベトナムでの日本語教育」、

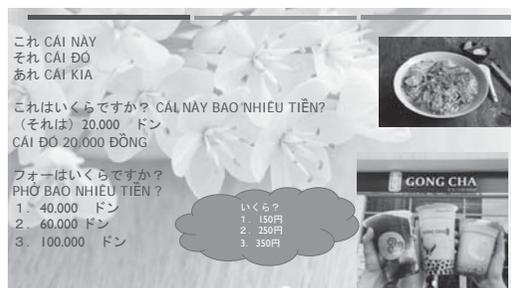


図1 ベトナム人留学生による発表資料

「ベトナムの文化」などと多岐に渡ったが、ベトナム人留学生は自分の文化を紹介するきっかけとして積極的に取り組み、調査表の日越（また結果の越日）翻訳を手がけるまで、同級生のために尽力した。フィールドワーク中には通訳や観光案内のみではなく、4人とも出身地であるハノイの「通」な知識を同級生と共有し、美味しいフォーが食べられるお店、地元のアプリを使って安全なタクシーの呼び方などを教えてくれた。ほぼベトナム語が話せない日本人学生がこのように、留学生の「世話をする」・「支援する」側から、「世話してもらう」・「支援される」立場に移ることによって、互いに対する見方が変わったことは、以下の調査結果で明確に示されている。

3. 学部生を対象とする「多文化意識」に対するアンケート

筆者は上記のベトナムフィールドワークから帰国した2019年11月13日からおよそ1ヶ月をかけて、国際福祉開発学部の1、2年生を対象にアンケートを実施した。アンケートの実施方法はGoogle Formで、匿名で実施したが、一人の学生が1回しか答えられないという制限と、大学のメールアカウントから入らないとアンケートを開くことができないという制限をかけた。

アンケート当時、在籍している学部生は1年生120名（内留学生28名）、2年生70名（内留学生11名）であった。有効回答数は102（1年生64名〔内留学生15名〕、2年生39名〔内留学生8名〕）で、全体の回答率は60.0%であった。アンケートの目的は主に（1）1年生と2年生の多文化意識（特に、学部内で留学生・日本人学生の双方に対する理解や接触に対する意図）に明確な差があるかどうかと、（2）学生同士の多文化意識が入学してから変わったかどうか、そして変わったとしたら、そのきっかけとは何だったのか、を明確にすることであった。以下に、調査の結果を示しながら考察する。

3.1 留学生・日本人学生が互いに「仲良くしたい」思考

まず、全学生を対象に、「日本福祉大学に入学したばかりの自分を出来るだけ思い出してください。〔日本人のアンケートの場合〕留学生・〔留学生のアンケートの場合〕日本人学生（以下、「〔日本人学生・留学生〕」と省略する）と友達になりたいとっていましたか？」と聞いた。さらに、2年生に対して「2年生になったところ、入学当初と比べて、〔日本人学生・留学生〕と友達になりたいとっていましたか？」と聞いた。

図2で示すように、1年生の答えを見ると、「積極的に日本人学生と友達になりたいと思った」と答えている留学生が46.7%で、「積極的に留学生と友達になりたいと思った」と答えた28.8%の日本人学生を17.9%上回っている。1年生当時の気持ちを振り返ってもらった2年生も、入学当初に関する答えがほぼ同じ程度の開きを示している（「積極的に日本人学生と友達になりたいと思った」と答えた留学生の割合が62.5%に対して、「積極的に留学生と友達になりたいと思った」と答えた日本人学生が20.6%低く、41.9%である）。

しかしながら、過去の自分を振り返った2年留学生の62.5%が1年生の時に日本人の友達を

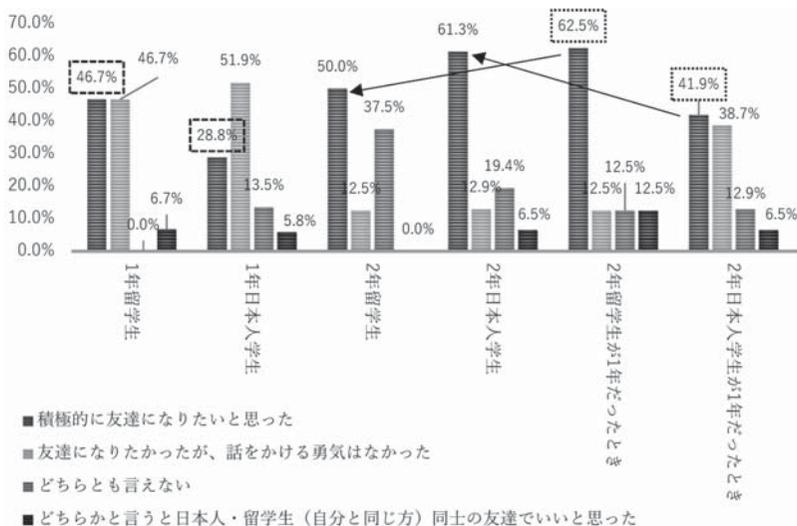


図2 年度始めに、日本人⇄留学生が互いに「友達になりたい」と思った程度

作りたいと強く思っていたのに、2年生になった時点では「積極的に日本人学生と友達になりたいと思った」と答えた学生が50%に減少した。日本人の友達がたくさん作れると期待を膨らませて入学したものの、1年間の試行錯誤が終わると少し勢いをなくしている気持ちが窺える。これに対して、日本人学生の「積極的に留学生と友達になりたい」という気持ちは入学当初より2年生になってからの方が高くなっている。日本人学生はむしろ、1年間の多文化コミュニケーションに対する試行錯誤を終えるとあえて留学生と日常的に一緒にいることに少し「慣れた」ことを示すかもしれない。

3.2 留学生・日本人学生の交流の程度

次に、全学生を対象に「今年度、[日本人学生・留学生]との関わりを持ちましたか?」と聞いた。図3で示すように、アンケート当時の1年生日本人学生も、1年生当時の気持ちを振り返ってもらった2年生日本人学生も、「授業中には一緒に作業したがプライベートにおいて付き合いはなかった」が一番多かった(1年生65%、振り返った2年生45.2%)。2年留学生が1年生の時を振り返ると「学校にもプライベートにも、授業日以外にも付き合いがあった」と答えた学生はいないが、同じ学生が2年目を振り返ると50%はこのような付き合いがあったと答えた。同じく、2年生の日本人学生が1年生の時を振り返ると9.6%しか「学校にもプライベートにも、授業日以外にも付き合いがあった」と答えていないが、2年生になるとこの答えは61.3%にまで増えている。このことから、アンケート当時の2年生留学生が、2年生はじめに日本人と友達になる自信を若干失っていたのにも関わらず、個人的な付き合いも含めて友情関係が深まったことが窺える。2年生の1年生当時の経験と比べて、アンケート当時の1年生留学生のうちすでに40%は「学校にもプライベートにも、授業日以外にも付き合いがあった」と答えた。この学年の

留学生との接触による日本人学生の「多文化」に対する意識変化

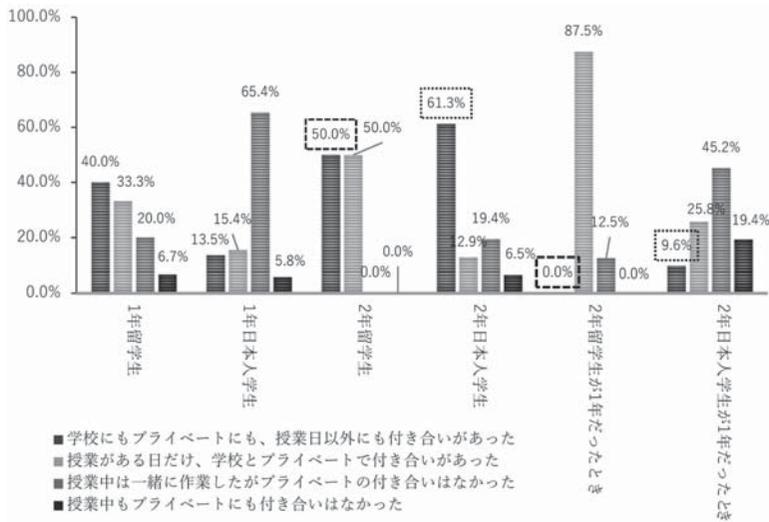


図3 1学年の間、日本人と留学生間の付き合いの程度

留学生は1つ上の学年より入学時における日本語能力が高いこともあるせいか、1年生の方が文化を跨ぐ友情関係を作るのが早かったように見える。

ここでさらに2年生の回答者をベトナムフィールドワークに参加した学生とそうでない学生に分けてみると、ベトナムフィールドワークの準備などがきっかけとなったのか、参加経験のある学生たちは互いに寄り添っていることがわかる。図4で示すように、ベトナムフィールドワーク

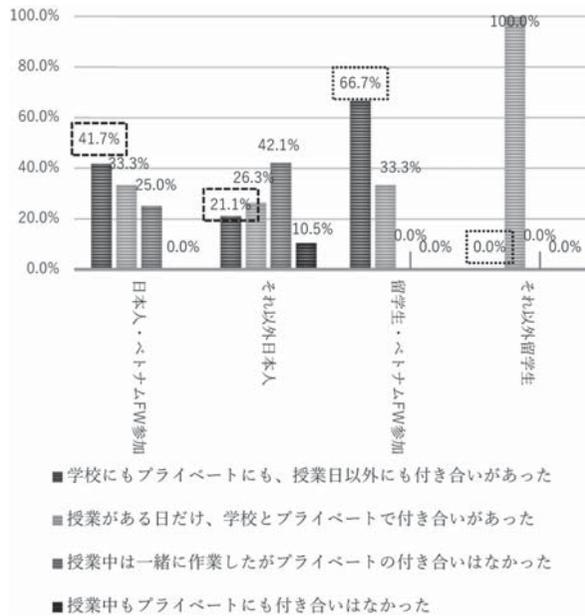


図4 ベトナムフィールドワークに参加した学生とそうでない学生の付き合いの程度

企画に参加した日本人学生 (n = 12) の 41.7%と留学生 (n = 6) の 66.7%が今年度を通じて「学校にもプライベートにも、授業日以外にも付き合いがあった」と答えている。ベトナムフィールドワークに参加しなかった2年留学生 (n = 2) のうちここまでの付き合いがあると答えた人はおらず、参加していない日本人学生 (n = 19) のうちそう答えたのは 21.1%のみである。

3.3 留学生・日本人が仲良くなったきっかけ

次に、留学生と日本人学生に「もし1年生の時に〔日本人学生・留学生〕と仲良くなった特定のきっかけがあったら、そのきっかけを教えてください」と聞いた。この間は複数回答可で、合計 64 の答えがあり、図 5 で示すようにグループワークに続き、ワールドユースミーティングへの参加が交流の大きなきっかけとなっている。「その他授業中」というきっかけをあげた人のうち、「パソコンの操作の仕方を教えた」(日本人)、「留学生がわからない日本語があって声をかけられ、英語で説明した」(日本人)、「授業でわからないことがあって周りの日本人学生から教えてもらったのがきっかけで友達になった」(留学生) というように、授業中に互いに声をかけられる環境がきっかけになったことが窺える。「その他」の答えの中には「留学生が話かけてくれたのがきっかけです」(日本人学生) や「オープンキャンパスで留学生と一緒に作業した」(日本人学生) という答えもあった。さらに2年生を対象に、「もし2年生の時に留学生・日本人学生と仲良くなった特定のきっかけがあったら、そのきっかけを教えてください」と聞いたところ、31 の回答をもらったが、中には2年生から始められる TA 活動 (日本語教師養成プログラムを履修している先輩がボランティアのアシスタントとして留学生の日本語の授業に参加する活動) や、ベトナムフィールドワークの準備もあげられた。結果は図 6 で示す。

2年生からの「その他」の回答には、「突然仲良くなった」(留学生) や「自分が自信を持っ

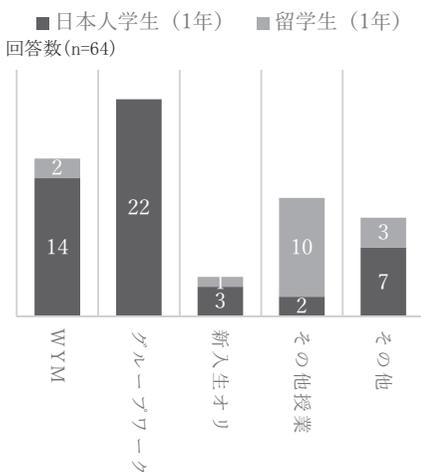


図 5 全学生が1年時、日本人と留学生間仲良くなったきっかけ

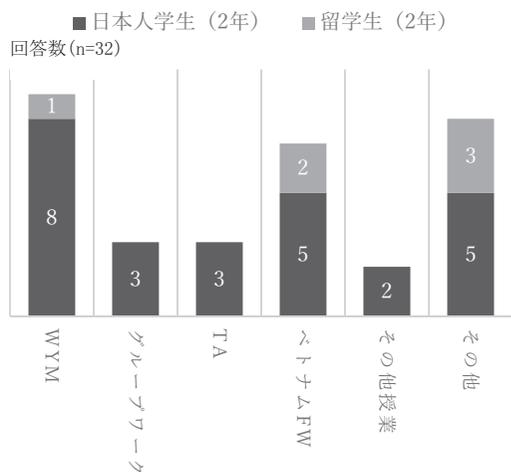


図 6 2年生が2年時、日本人と留学生間仲良くなったきっかけ

てやったら、いい結果になった」(留学生)というコメントもあった。また、自由なコメントとして、2年日本人学生からは「日本語 [の授業] のTAの活動や、やはりワールドユースミーティングの存在が大きかった。立場的にも1年生のサポートをすることが多かったので、自然と留学生に触れることが多かった」というコメントがあった。学生から見たら「自然と...」とあるが、実際に「きっかけづくり」は学部の活動に組み込まれている成果でもあるといえる。

3.4 留学生・日本人学生における「意識変化」

最後に、ベトナム研修に参加した17人の学生を除く85名の学生に「[日本人学生・留学生]と関わることによって、自分の考え方は少しでも変わったと思いますか?」と聞いた。また、ベトナム研修に参加した学生に「ベトナム研修に参加して、[日本人学生・留学生]に対する考えかたは変わりましたか?」と聞いた。結果は下記の図で示すとおりである。

図7a, 7bから見られるように、多くの日本人学生も留学生も互いに交流による意識の変化を認めている。回答者のうち、ベトナムフィールドワークに参加しなかった留学生(n=2)の内のみ、「考え方が変わった」という人はいなかった。この2名以外、全ての学生のグループで「考え方が変わった」という回答が多数を占めていたが、ベトナム研修に参加した学生ではその傾向が顕著である。フィールドワークの準備や実施を通じて、学生同士が互いに示した努力や工夫の成果といえる。

さらに、「考え方が変わった」と答えた学生に自由回答として「どのように変わったか」と聞いたところ、表1のようなコメントが寄せられた。意識の変化を強く感じさせるものが多いため、本論文に盛り込むことにした。なお、学生のコメントはアンケートでいただいた原文のまま掲載している。

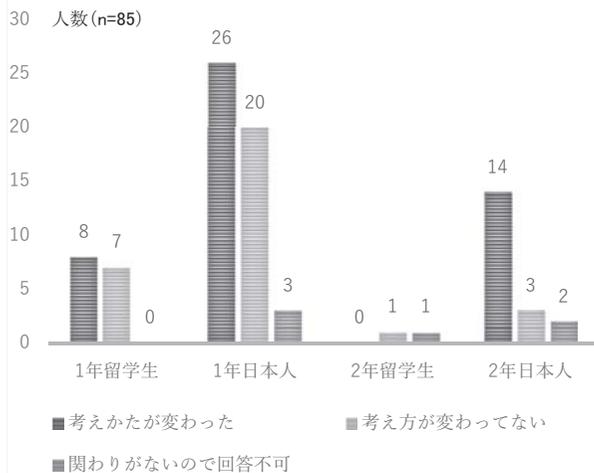


図7a 日本人⇄留学生間の関わりによる考え方の変化 (ベトナムフィールドワーク未参加学生)

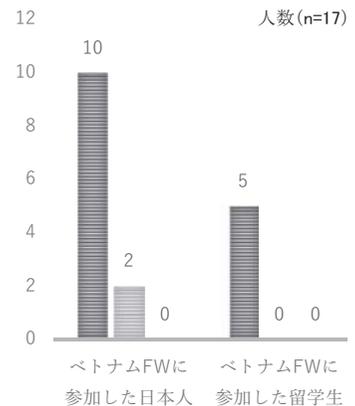


図7b 日本人⇄留学生間の関わりによる考え方の変化 (ベトナムフィールドワーク参加学生)

表1 「考え方がどのように変わったか」に対する回答

コメント	日本人・留学生	学年
別の方向からも物事を考えられるようになったと思う。	日本人	2
もっと外（海外）に目を向けるべきだと思えし、また、言語能力の重要性に気づいた。	日本人	2
わざわざ留学に来るんだから超エリートなのかな？って思ったら、わからない所はわからない、難しい所は難しいと言ってくれて、うまく言えないが同じ人間なんだなって感じた。	日本人	2
留学生と実際に関わって、日本に住む外国人がどんなことを不便としているのかが少しわかった。	日本人	2
海外の人に対して偏見を持たなくなった。	日本人	2
色々な文化の人々がいるので宗教観なども気にするようになった。	日本人	1
国際に入るまでは日本の事ですらあまり興味が無かったが、入り留学生と関わることで他の国（e.g. ベトナム、フィリピン、ネパール）の事も教えてもらい、学ぶことができた。	日本人	2
日本人だけだと考えが固定してしまうが、留学生がいることによって変わった意見ができる。	日本人	2
自分の視野が、少しずつ広まってきたと実感でき、留学生と出会ったきっかけで、いろんなことに挑戦したいと思うようになり、考え方や見方が変化した。	日本人	2
日本のメディアでは断片的にしか外国のことを知らないが、生の声を聞くことで、その国の知らなかった新しい情報を知ることができること。	日本人	2
自分が思っていた以上に彼らはフレンドリーだということを知ることが出来たし、日本語T Aで活動しているうちに話しかけやすくなった。	日本人	2
外国人は怖いイメージだったけど、比較的フレンドリーで、面白い。	日本人	1
イスラム教を信じている人はちょっと怖いイメージがあったけどそれがめちゃくちゃステレオタイプだったと思う。	日本人	1
留学生の人々と関わることで、私が想像していた国のイメージなどが大きく変わりました。例えば、私は今まで、中国人は、怖くて、口が悪いイメージがあったけど、実際に喋ってみると、とても優しく、挨拶など、話しかけてくれるので、今ではとても仲良しです。 また、色々な国の人と話すことで、その国の文化や習慣などが知ることも出来て、とてもいい体験になっています！！	日本人	1
留学生と関わることは怖さがとてもあったけれど今はそれが全くなくなった。	日本人	1
怖い人ばかりだと思ったけど、そーでもなかった。	日本人	1
世界にはあらゆる考えを持つ人がいること。	日本人	1
日本以外に目を向けられるようになった。	日本人	1
外国の人とは、価値観などがあまり分かり合えないと思っていたけど、実際に関わってみると全然そんなことなく刺激的でたのしい。	日本人	1
留学生は、日本人の私たちよりも色々頑張っていて、学費も学校に通いながら自分で稼いだりしていて本当にすごいなと思った。私ももっと頑張らなくてはいけないなと思われました。	日本人	1
自分が当たり前だと思っていたものが他の人にとって当たり前じゃないことをわかりました。	日本人	1
そもそも私は高校まで外国人の方と一緒に何かを取り組むと言った経験がありませんでした。外国人 = 言い方がキツイとか、怖いといった負のイメージがとても強かったです。しかし、大学に入り留学生の子達と接するようになって、その国の文化を知ることが出来て良かったなと思います。	日本人	1
国が違うことは些細なことであって日本人の学生と大して変わらないということに気づいた。もっと遠い存在のように感じていた。	日本人	1
分からない時、よく教えてくれた。	留学生	1
分からない時、友達作ることできるようになりました。	留学生	1
性格が変わった。	留学生	1
まるやかになったと思う。	留学生	1
勉強についての考え方が変わりました。もっと頑張る動機になった。	留学生	1
人がやりたくない時は自分のチャンスだと思うようになった。	留学生	1

4. 終わりに—今後の課題

本論文において日本福祉大学国際福祉開発学部の「学生間の多文化共生」に対する取り組みを紹介し、学生を対象としたアンケートから一定の成果を見いだすことができた。もちろん、アンケートへの参加が任意だったため、答えてくれた学生はキャンパス内の多文化共生に関心が高い可能性があり、今後この調査研究を続ける上でそのような確証バイアスが結果に影響を与えないようにさらなる工夫が必要と思われる。しかし、60%の対象学生が回答した結果から、学部の特徴が多文化意識の向上に貢献していることは明らかになったと思われる。

学生間の「仲良くなるきっかけ」となった授業中のグループワークはそもそも学部の大きな特徴であったが、このような結果を継続的に出すためには引き続き教員の努力と工夫が必要だと思われる。筆者の経験からすると、初めに学生同士にグループ分けをさせると依然として仲のいい友達と一緒に取り組むため、留学生と日本人学生が同じグループになることはあまりなく、別々に固まる可能性が大きい。最初に教員が気合いを入れて、留学生と日本人学生を一緒に作業させる「きっかけ作り」が必要と思われる。

また、WYM やゼミで企画できるような活動において、リーダーシップを与えることによって、留学生が「世話される」対象から他の学生を「世話する」立場になる。モチベーションが上がると同時に、学部の一員としての自信につながる。ベトナムフィールドワークに参加した留学生に振り返りを書かせたら「今回のベトナム研修では色々なことができました。自国のことが日本人学生に紹介できました。とても嬉しいです。一週間日本人と一緒に生活していたので、みんなの生活が理解できて、日本人学生と仲が良くなりました。他の研修に参加のチャンスがあったら、参加したいと思っている」というコメントが出た。このような企画の背景には教員の手間や努力もあるが、留学生が先頭に立つ授業などの企画は、上記のアンケート結果が示すように、間違いなく日本人・留学生の多文化意識を深める結果をもたらす。この認識を今後のシラバスや授業の準備にさらに意図的に盛り込むことにより、さらなる「共生」に繋げたい。

一方、課題として、無視できないのは留学生から寄せられた、ネガティブな経験についてのコメントである。例えば、時間の調整ができなくて日本人の先輩に怒られたり、一緒に作業するのが面倒くさいと言われたり、日本語で発言をしたら日本人の同級生に笑われたり、積み重なると自信を失ってしまうような発言が時々日本人学生から出ているようである。こういう行動はおそらく互いへの理解が足りない実態を示す点の一つであり、学生同士の理解が深まる活動をさらに取り入れる必要性が感じられる。今後、そういった発言を抑えることができる学部を目指したい。

本論文の筆者も外国人でもあり、日本語学習者でもある。いまだに珍しいケースと思われる、日本の大学における日本語教師の養成を含む日本語教育の主担当をさせていただいている。今回の調査には含まれなかったが、留学生からも日本人学生からも、日本語教育主担当が外国人であ

ることにより、外国人の立場について考えさせられたというコメントをよく耳にする。日本福祉大学からある意味で常識を超えたような職業を任せていただき、特に珍しくないかのように日常的に付き合ってくれる同僚がいるからこそ、筆者が「指導する」外国人を学部内でモデリングでき、留学生にリーダーシップを与えるゼミ活動を企画したり、本論文で紹介する調査研究を実施することができたと思われる。日本語が流暢な外国人住民が増えている中、あらゆる取り組みに対する多様なリーダーシップ構造を形成することこそ、今後の「成功した多文化共生」に大きく貢献すると期待される。

注

- 1 "Successful multiculturalism builds the bonds of community that lead to interracial, interethnic friendships" (和訳は筆者による) <https://www.merriam-webster.com/dictionary/multiculturalism> 2020/07/01 閲覧
- 2 "Someone's cultural awareness is their understanding of the differences between themselves and people from other countries or other backgrounds, especially differences in attitudes and values" (和訳は筆者による) <https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/cultural-awareness> 2020/07/01 閲覧
- 3 JASSO HP https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/_icsFiles/afieldfile/2020/04/06/datar01z.pdf 2020/05/01 閲覧
- 4 eGov https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=322AC0000000026 2020/07/10 閲覧
- 5 日本私立大学団体連合会 HP https://www.shidai-rengoukai.jp/s_courses/index.html# 2020/05/01 閲覧.
- 6 文部科学省 HP https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kouritsu/index.htm 2020/05/01 閲覧.
- 7 日本私立大学団体連合会 HP https://www.shidai-rengoukai.jp/s_courses/index.html# 2020/05/01 閲覧. 現在いくつかの大学が「募集停止中」となっているが、2020年春からのコロナウィルスの感染拡大がどれほどこの状況を影響しているかが現時点で不明瞭である.
- 8 場合によっては「日本語別科」, 「日本語教育別科」などとも呼ぶ.
- 9 名古屋外国語大学 HP <https://www.nufs.ac.jp/faculties/japanese-center/> 2020/05/01 閲覧
- 10 名古屋外国語大学 HP <https://www.nagoyagaidai.com/internationalcampus/> 2020/05/01 閲覧
- 11 2020/05/26 AM9.15
- 12 名古屋学院大学 HP <https://www.ngu.jp/media/shakaijin-ryugakuseisuu2019.pdf> 2020/05/01 閲覧
- 13 文部科学省 HP https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kouritsu/index.htm 2020/05/01 閲覧.
- 14 文部科学省 HP https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/03062301/002/002.htm 2020/05/01 閲覧
- 15 東京外国語大学の学部在籍者数を見ると、言語文化学部に在籍している1870人の学生のうち、412名が「長期留学生」と位置付けられている(2019年5月1日現在)
- 16 JAPAN STUDY SUPPORT HP <https://www.jpss.jp/ja/univ/47/> 2020/05/01 閲覧. 学部によっては数字が「国際プログラム群」とそうでない学科が混在しているので、正確な数字を打ち出すことが不可能.
- 17 東京都立大学: 学部短期留学生52名, 正規学部留学生101名(2019年10月1日現在) (http://www.ic.tmu.ac.jp/files/about/students_201910.pdf) 山口大学: 研修生, 交換留学生を含む短期留学生150人前後, 正規学部留学生47名(うち, 40名が工学部)(2019年2月1日現在) (http://www.yamaguchi-u.ac.jp/library/user_data/upload/File/gakuhou/2018/3/04-19-03.pdf)

- 18 日本福祉大学 HP <https://www.n-fukushi.ac.jp/news/18/180802/18080202.html> 2020/05/01 閲覧
- 19 日本福祉大学 HP <https://www.n-fukushi.ac.jp/faculties/gakubu/kokusai/facil/wym/index.html> 2020/05/01 閲覧

引用文献

- Bauman, Z., Bauman, L (訳) (2011), Culture in a Liquid Modern World. Cambridge, Polity Press.
- 永井涼子, 南浦涼介 (2014) 「大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるかー留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試みー」大学教育 11: 50-67
- 根本直弥, 竹田稔史, 山崎 瑞紀 (2013) 「留学生と日本人学生の交流促進のための 教育プログラムの設計」東京都立大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル 14:34-37
- 山本幹子 (2019) 「大学における「共修」の可能性」口頭発表, 言語文化教育学会, タンロン大学
- 山下悠貴乃 (2019) 「留学生と日本人学生が互いに学びあう場の構築を目指した学習活動のデザイン」口頭発表, 言語文化教育学会, タンロン大学